第6節　光構内（月待山遺跡・御手洗遺跡）の調査

1．教育学部附属光小学校体育器具庫新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区　教育学部附属光小学校体育館東側

調査面積　約53㎡

調査期間　平成17年5月19日～5月31日

調査担当　田畑直彦

調査結果

（1）調査の経過（図41、写真58）

教育学部附属光小学校体育館器具庫新営工事が計画された。前身建物は木造で老朽化が著しいために取り壊され、器具類は体育館等に仮置きの状態であったためである。

工事予定地は構内においても丘陵部に近く、予定地から東へ約40mの地点では、平成2年度に行われた附属小学校運動場改修工事に伴う発掘調査で6～7世紀代にかけての遺構面が2面検出されている。[註1] また、平成15年度に実施された附属小学校エレベータ昇降路等新設に伴う試掘調査・立会調査では江戸時代後半を上限とし、多くは附属小・中学校の前身施設に関連すると考えられる遺構面と古墳時代の遺構面が2面検出されている。[註2]

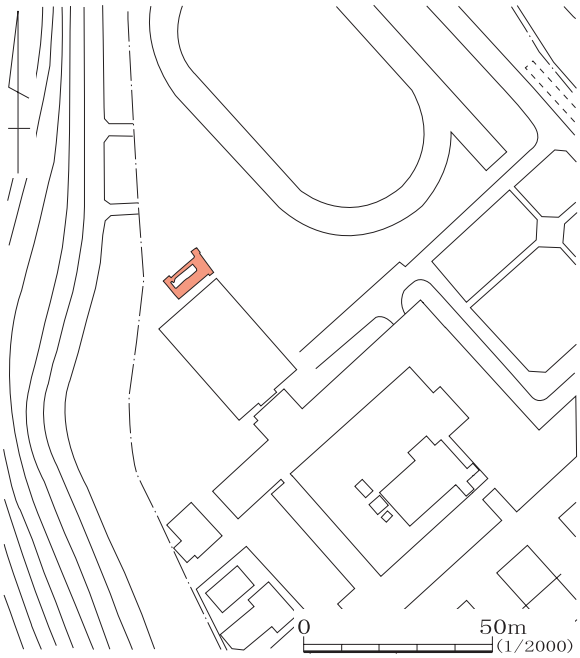

図41 調査区位置図

以上の状況から、前身の木造建物が存在したとはいえ、工事予定地内には埋蔵文化財が遺存していることが十分に考えられた。このため、埋蔵文化財資料館専門委員会の判断に基づき、埋蔵文化財の予備発掘調査を行うこととなった。なお、調査区では運動場整備に用いるマサ土が大量に集積されていたため、これらを除去した後に掘削を行った。

（2）基本層序

調査区の基本層序は下記の通りである。調査区の西側は樹木による攪乱が目立ち、一部では分層が困難なほど顕著であった。

第1層…表土　浅黄色（2.5Y7/4）マサ土（層厚約2～45㎝）

第2層…造成土（2－1～5に細分、層厚約10～20㎝）

第3層…造成土　黒褐色（2.5Y3/1）砂質土（層厚約20～50㎝　樹根による攪乱が多い）

第4層…近～現代遺構検出層　暗灰黄色（2.5Y3/1）・明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土（4－1～2に細分、層厚約40㎝）

第5層…明黄褐色（2.5Y6/6）粗砂・礫（5－1～3に細分、層厚約80㎝以上）

第2、3層は造成土である。第3層は前身の木造建物に伴う整地土と見られ、部分的にコンクリート舗装が残存していた。また、第2、3層からは近～現代の瓦、陶磁器等が大量に出土し、古墳時代、江戸時代の遺物も少量出土した。第4層は近～現代の遺構検出層であるが、同層は古墳時代の遺構検出層である平成2年度調査の第3層[註3]：明黄褐色（2.5Y6/6）細砂、平成15年度調査の第3層[註4]：黄褐色（10YR5/6）砂礫に対応する可能性がある。第5層は平成2年度に実施された附属小学校運動場改修に伴う試掘調査Dト

レンチにおける第4層：明黄褐色（2.5Y6/6）細砂混じり礫、Eトレンチにおける第4層：明黄褐色（2.5Y7/6）細砂混じり礫以下の土層に対応する可能性が考えられる。この層からは摩滅した土師器片が1点出土した。

（3）遺構

今回、第4層上面を検出面として近～現代のピット3基(Pit1～3)、落ち込み1基（SX1）、石垣を検出した。これらの遺構は附属光小・中学校の前身施設である山口県立工業学校（明治36年創立）、山口県室積師範学校（大正3年設立）等に関連する遺構と考えられる。

ピットの平面形はいずれも楕円形で、Pit1の平面規模が30×36㎝、深さ24.3㎝、Pit2の平面規模が15×19㎝、深さ2㎝、Pit3の平面規模が45×45㎝、深さ11㎝である。いずれも底面に礎石等は認められなかった。また、Pit3の埋土からコンクリート片が出土したほかは、遺物も出土しなかった。調査区の東部で検出したSX1は調査区外に広がるため形状は不明であるが、少なくとも直径4m以上の規模を持つ。第5層から掘りこまれており、埋土からは近～現代の遺物が出土した。形状が不明なため落ち込みとしたが、廃棄土坑の可能性が高いと考えられる。

このほか、調査区北部で石垣を検出した。第4－1・2層上面で構築されており、花崗岩の切石が4個、1段積みで北東－南西方向に直線上に並んだ状態で検出した。検出した幅は約234㎝、高さは40㎝である。裏込め土からは近～現代の遺物と古墳時代～江戸時代の遺物が少量出土した。ごく一部を検出したにすぎないため性格は不明であるが、調査区付近の附属小学校前身施設の建物も石垣と同方向の長軸を持つことから、これらの建物に関連する遺構であろう。

（4）遺物

第2、3層、石垣裏込め土から桟瓦片を主体とする近～現代の遺物が大量に出土した。また、これらに伴い少量ではあるが、古墳時代～江戸時代の遺物も出土した。ただし、造成土という性格上、これらは学外から持ち込まれた客土等に含まれていた可能性がある。

1は土師器甕で復元口径11.6㎝。調整は内外面ナデで外面にタテハケがわずかに残る。古墳時代中～後期に属するものと推測される。2は須恵器甕口縁部で端部を肥厚させる。調整は内外面ヨコナデである。古墳時代中～後期か。3は平瓦片。凸面に格子目タタキ、凹面に布目痕が残る。4は高台が高い広東碗で胴部外面には染付で草花文と圏線1条、内面には圏線を2条施す。

（5）小結

今回の予備発掘調査では、平成2・15年度の調査で確認された古墳時代の遺構面に対応する可能性がある土層（第4層）を確認した。ただし、同層を検出面として近～現代の遺構が確認されたのみであり、顕著な埋蔵文化財は認められなかった。表土下には層厚が平均30～40㎝の造成土である第2、3層が確認されたことから、古墳時代～江戸時代の遺構面が存在したとしても造成により削平された可能性が考えられる。しかし、調査地の北西側に連なる附属小学校運動場においては、昭和63年度の遊器具移設に伴う立会調査[註5]、平成3年度の屋外施設設置に伴う立会調査[註6]で遺物包含層が確認されている。いずれも小規模な立会調査であるため詳細は定かでないが、調査地周辺では埋蔵文化財が存在する可能性が高く、今後の掘削工事においても十分な注意を払う必要がある。

1　表土　浅黄色（2.5Y7/4）マサ土
2－1　造成土　灰色（5Y1/4）砂質土
2－2　造成土　灰白色（2.5Y1/8）マサ土
2－3　造成土　マサ土と黒褐色（2.5Y3/1）砂質土のブロック土
2－4　造成土　マサ土と黒色（2.5Y3/1）砂質土のブロック土（瓦片を多く含む）
2－5　造成土　明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土と黒褐色（2.5Y3/1）砂質土のブロック土
3　造成土　黒褐色（2.5Y3/1）砂質土（樹根による攪乱が多い）
4－1　暗灰黄色（2.5Y3/1）砂質土
4－2　明黄褐色（2.5Y7/6）砂質土
5－1　明黄褐色（2.5Y6/6）粗砂
5－2　明黄褐色（2.5Y7/6）礫
（2～3㎝大の礫主体）
5－3　明黄褐色（2.5Y7/6）粗砂
5－1と同一の可能性あり
Pit3 埋土
a　黒褐色（2.5Y3/1）粗砂
SX1 埋土
b　暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土
c　暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土と
黒褐色（2.5Y3/1）のブロック土

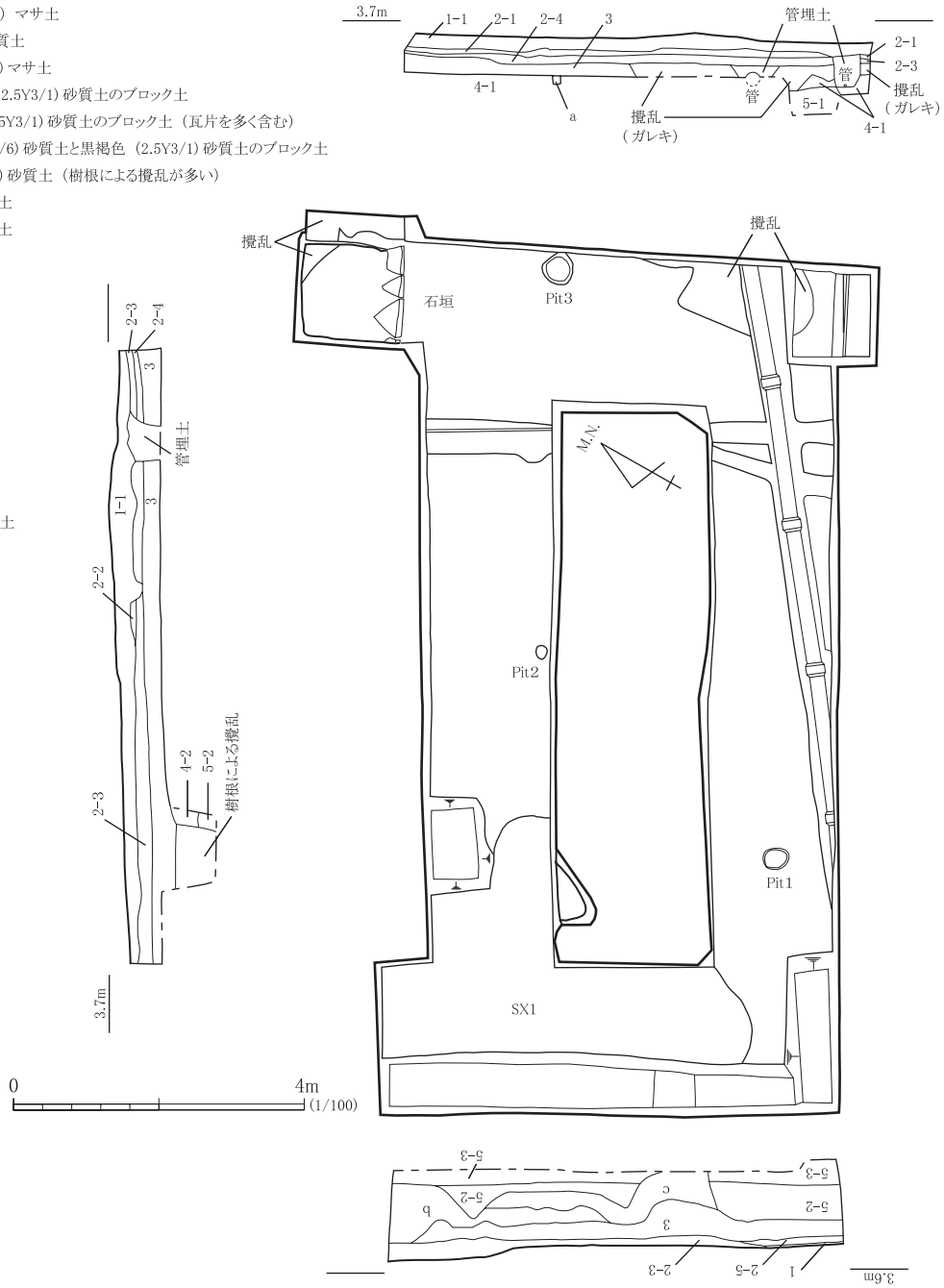

図 42　調査区平面図・断面図

写真 58　調査前全景（北東から）

写真 59　調査区全景（北東から）

写真60 調査区北東壁土層断面（北西から）

写真61 調査区北西壁土層断面（南東から）

写真62 調査区南西壁土層断面（北から）

写真63 近～現代石垣（東から）

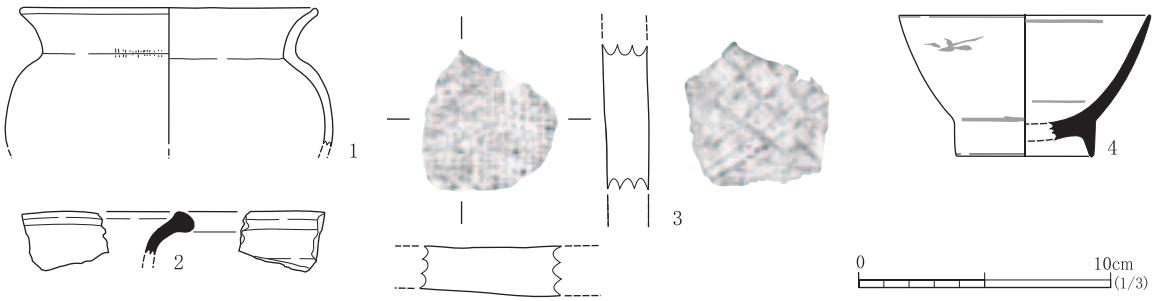

図43 出土遺物実測図

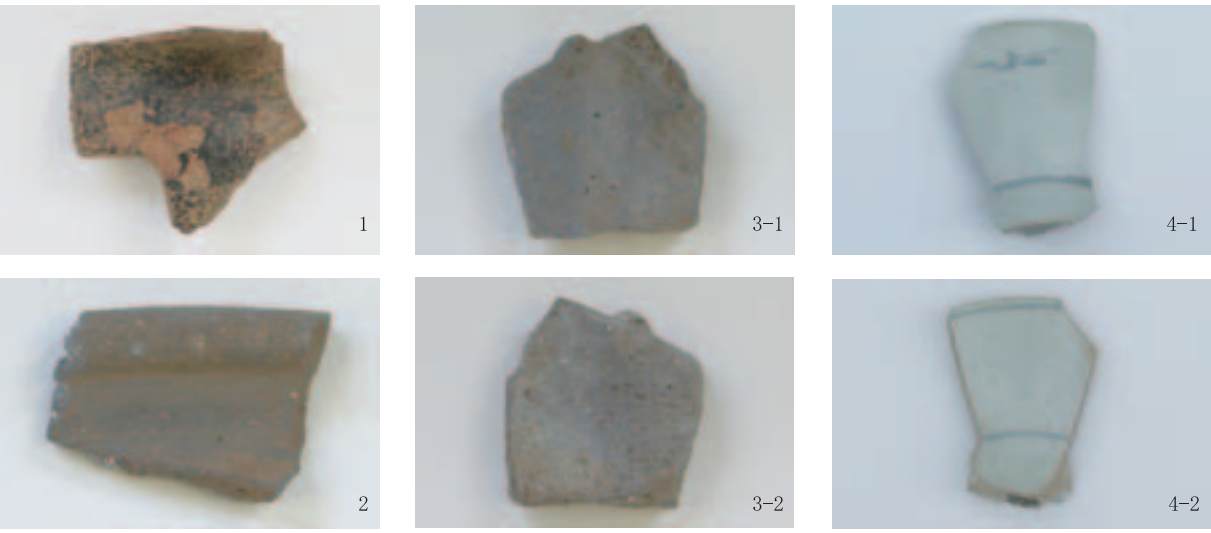

写真64 出土遺物

表5 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	第2～3層	土師器 甕	口縁部～胴部	①(11.8)	①黒褐色(10YR3/1) ②にぶい橙色(5YR6/3)	1mm以下の砂粒を多く含む	
2	石垣裏込め土	須恵器 甕	口縁部		①②灰色(5Y6/1)	1mm以下の砂粒を多く含む	
3	第2～3層	瓦			①②灰色(N6/0)	0.1～2mmの砂粒を多く含む	
4	石垣裏込め土	磁器 碗	口縁部～底部	①(10.0)	素地 灰白色(7.5Y8/1) 釉 灰白色(7.5Y7/1)	精緻	染付

［註］

1）河村吉行（1992）「第3章　光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ｘ』，山口

2）横山成己（2005）「第1章第6節 教育学部附属光小学校エレベータ昇降路等新設に伴う試掘調査・立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』，山口

3）前掲註1

4）前掲註2

5）河村吉行（1990）「第2章第5節1 教育学部附属光小学校遊器具移設に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』，山口

6）河村吉行（1993）「第4章第4節1 教育学部附属光小学校屋外施設設置に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＩ』，山口

2．教育学部附属光小・中学校護岸改修工事に伴う立会調査

調査地区　教育学部附属光中学校運動場東側

調査期間　平成18年2月3日・17日

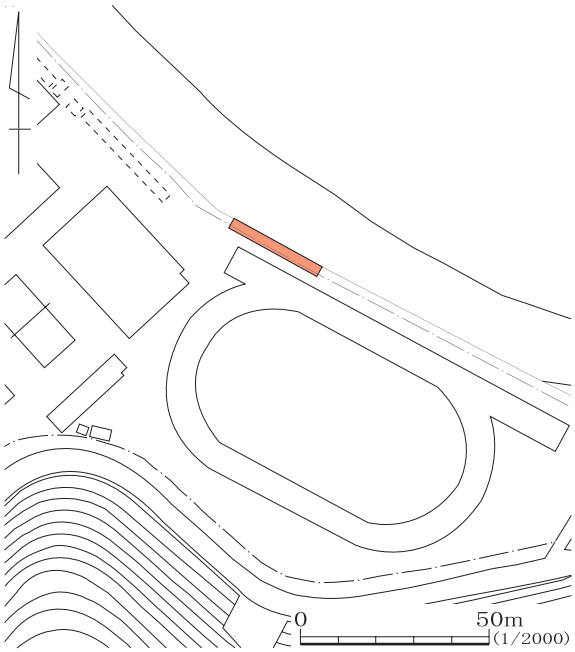

図 44 調査区位置図

写真 65 調査区東部土層断面

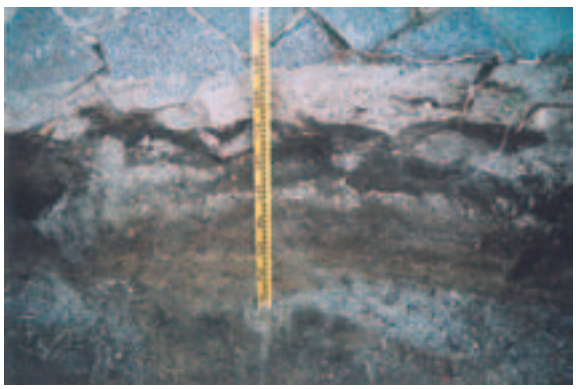

写真 66 調査区西部土層断面

調査面積　約40㎡

調査担当　田畑直彦

調査結果　平成17年9月6日に山口県を襲った台風14号により、附属光中学校運動場北側の石積護岸の一部が崩落した。この被害による護岸改修工事が計画されたことを受け、工事掘削時に立会調査を実施することになった。掘削範囲は海岸に沿った幅1.8m×26.7mの範囲である。

調査区東半部は被害が少なかったため、石垣基礎部分についてのみ掘削が行われた。現地表下74㎝までが石垣で、74～130㎝が造成土である黒褐色（2.5Y3/1）砂質土、115～160㎝が黄褐色（2.5Y5/3）砂質土であった。黄褐色砂質土から摩滅した土器片が少量出土した。この層は礫を含む互層になっており、石垣構築以前の波浪による2次堆積層と考えられる。

調査区西部は石垣を含めた全面的な掘削が行われた結果、現地表下90～120㎝で積石が検出され、積石間から近～現代の瓦片が出土した。これらは自然石や割石を乱雑に積み上げた形態から、現在の石垣以前に存在した近～現代の石垣の裏込めである可能性が考えられる。

なお、今回調査地から北西へ約50mの地点では昭和58年度に実施された附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査で、近世～近代の石垣状遺構が検出されている[註1]。また、平成12年度に広範囲で実施された護岸改修工事に伴う立会調査でも近世～近代の石垣が検出され、近世～現代の陶磁器が出土している。上記の調査からも、調査地周辺においては今後とも埋蔵文化財の保護に注意する必要がある。

［註］

1）河村吉行（1985）「第4章　教育学部附属光小学校自転車置場設置に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』，山口